マージェリー・ケンプの旅とワードペア

青　木　繁　博

Margery Kempe's Journey and Word Pairs

Shigehiro Aoki

1　はじめに

「ワードペア」とは、and をはじめとする接続詞により関連する２語が結び付けられたもので、特に中世英語の諸作品において頻出するものである。ペアとなる２語の間にある意味関係は、同意語、類義語、反意語、同一カテゴリーに属する語など様々である。本論文では *The Book of Margery Kempe*（以下MK）を対象にしたこれまでのワードペア研究を概観し、言及されてきたペアの用例を整理する。それを踏まえて、改めて当該テキストの文脈に基づいた考察を行い、特に Book II の大半を占める「旅」の記述においてワードペアがどのように用いられているのかを考察する。これにより、ある種の表現技法として機能するワードペアの様態を明らかにすることを目指す。

2　MKとワードペア、先行研究の概観

これまで、特にワードペアが多いとされる MK に対しては様々な研究が行なわれてきた。しかし諸研究の目的はそれぞれ異なるものであるため当然なのだが、引用された用例の数や種類には大きな違いが見られ、場合によってはある種の偏りも存在するように見受けられる。この章ではまず、今までの諸研究に見られるペアについてまとめてみたいと思う。その後、諸研究において挙げられた例にある共通点を分析する。

なお、ワードペア全般に関する先行研究としては、広く見渡せば Kikuchi、Shimogasa、渡辺、谷、Miwa and Li などもあるが、ここでは MK のワードペアに関するものだけに絞って考察を進めることにする。

２．１　諸先行研究の考察範囲とワードペアの用例数について

ＭＫ を対象にしたワードペアの研究としてここで扱うものは以下の諸研究である。Wilson、Shibata、Stone、Yamaguchi、Koskenniemi、青木（2007）、Katami（論文発表順）。

多くのワードペアの研究が MK を扱っていることは、MK にワードペアが多いことの裏付けでもある。しかし、ワードペアをどのように扱うかといった点では異同が見られる。各研究者が挙げた MK のペア例の中で、ペアの数やその種類といった面での相違を示すのが表１である。

表１ *The Book of Margery Kempe* を対象にした研究におけるワードペア用例の相違点

	用例数	MKに加えて扱うテキスト[iv]	接続詞の種類	構成要素の数（２語／それ以上）	構成要素の数（words／phrases）
Wilson (1956)	5[i]	Rolle, Julian	and	2 and more	words, phrases
Shibata (1958)	20	－	and, er, ne	2 (pairs only)	words
Stone (1970)	292[ii]	Julian	and, er, but, ne, or	2, 3, and 6	words, phrases
Yamaguchi (1971)	29	－	and, er, ne	2 and 3	words, phrases
Koskenniemi (1975)	41[iii]	－	and, er, ne	2 and 4	words, phrases
青木 (2007)	38	Julian	and, er, ne, or	2, 3, and more	words, phrases
Katami (2009)	14	Rolle, Hilton, Julian	and	2 (pairs only)	words

この表に関する注記：
[i] さらに“a general piling up of words”として、フレーズが例として挙げられているものが１例。
[ii] アリタレーション的なペアとそうでなペアのリストがあり、ここでは２つのリストを合計した数。
[iii] 引用されたペアの数は41例だが、MK全体では262例があったとしている。
[iv] Rolle：Richard Rolle of Hampole, Hilton：Walter Hilton, Julian：Julian of Norwich.

ここではまず、Shibata、Yamaguchi、Koskenniemi は MK のみを扱うが、それ以外は他のテキストとの比較をするなど、扱うテキストの範囲に違いがあることに留意すべきである。他テキストとの比較を行う研究においては、おそらく他の神秘主義的な著作にも通じるペアや、あるいは逆に MK において全く独自に用いられるようなペアに焦点がある可能性が高いと考えられる。

ワードペアの定義に関する部分、すなわち接続詞には and 以外に何を認めるのか、２語（ペア）のみを扱うのか、３語以上の例も同様に扱うのか、語同士の組み合わせだけでなく語句が結び付けられた例も扱うのかといった点について、研究によりその方針は様々であることも見て取ることができる。その違いは当然、挙げられたペアの種類の違いとなって表れる。

用例数の多寡については、各研究者のアプローチの違いや、ワードペアに対する評価などによるところが大きいと考えられる。Wilson はワードペアと MK の文体の単調さを結び付けていると考えられるが、それが正しいならば、ワードペアに対する否定的な評価ゆえに多くの用例を要しないと言える。Koskenniemi の用例数は MK のみを扱う研究の中でも特に多いが、それは Shibata や Yamaguchi が複数の語法の１つとしてワードペアを取り上げているのに対して、Koskenniemi はワードペアのみに着目していることに由来すると考えられる。なお Katami では、他作品との間で頻度等を比較することを目的として考察範囲が定められており、挙げられた例は該当する範囲にあるペアとなっている。

２．２　共通して挙げられているワードペアの例

先行研究で挙げられた例の中には、複数の研究者から言及されたペアもある。そうしたペアは、多くの研究者が考えるところの「典型的なワードペア」と捉えることもできるだろう。複数の研究者が言及したワードペアは15例あり、それは下に示した（１）から（15）の例である。

この15例を選ぶにあたっては、上述の先行研究からは２点を除外している。Stone はテキスト全体のペアをほぼ網羅的に抽出しているため、それと重複するかどうかはこの考察においてはあまり重要ではない。青木（2007）は筆者によるものなのでここでは客観性を保つ意味で除外する。したがって下に示すのは Wilson、Shibata、Yamaguchi、Koskenniemi、Katami の間で、二者以上により挙げられているペアである。なお、同じペアが MK の複数の箇所から引用されている場合などに綴字が異なるケースもある[1]。また名詞と動詞など厳密には異なる例もあるが、それらは簡略化のため同じ項目にまとめている。ペアの表記（ペアとして対応する語、または対応すると推測される語句等）については研究者の間で示し方に相違もあるが、ここではイタリックにて表記している。

（１）*cher* & *cuntenawns*（Shibata, Yamaguchi, Koskenniemi）
（２）*cryen* & *wepyn* / *wepyng er crying*（Shibata, Koskenniemi）
（３）*help* & *socowr*（Yamaguchi, Koskenniemi）
（４）*heuy* & *sory*（Koskenniemi; Shibata, “*sory* ne *heuy*”; Yamaguchi, “*sorwe* & *heuynes*”）
（５）*hyndryn* & *lette*（Shibata, Koskenniemi）
（６）*illusyons* & *deceytis*（Wilson, Katami）
（７）*joy* & *gladnes*（Yamaguchi, Koskenniemi）
（８）*joy* & *blysse*（Yamaguchi, Koskenniemi）
（９）*kyd* ne *knowyn*（Shibata, Koskenniemi）
（10）*mede* & *reward*（Shibata, Koskenniemi）
（11）*solas* and *comfort*（Shibata, Yamaguchi, Katami）
（12）*stabil* & *stedfast*（Wilson, Yamaguchi）
（13）*sygnys* & *tokenys*（Yamaguchi, Koskenniemi）
（14）*witte* & *wisdom*（Yamaguchi, Koskenniemi）
（15）*wroth* & *in gret angyr*（Yamaguchi, Koskenniemi）

先行研究の中でも、用例の共通性という点で特に関連が深いと考えられるのが Shibata、Yamaguchi、Koskenniemi という MK のみを扱う研究である。一見すると Koskenniemi の挙げた例が Shibata、Yamaguchi にも見られるといった様相であるが、それは Koskenniemi の用例数が比較的多いことが主たる要因であると考えられる。三者の間に限って、どのように用例が重複しているのかを調べた結果を表２に示す。

1　これらの研究のほとんどは Meech 版をテキストとしており、ここでの用例の形は各研究で挙げられた形にならったものになっている。

表２　Shibata, Yamaguchi, Koskenniemi の間で共通して見られるペアの数

	全用例数	独自のペア	共通するペア	二者に共通	三者に共通
Shibata	20	13	7		
				1	
Yamaguchi	29	20	9	4	2
				6	
Koskenniemi	41	29	12		

表２が示すように、Shibata、Yamaguchi、Koskenniemi のいずれも、割合としては約３分の１が共通するペアであり、約３分の２がそれぞれの研究者が独自に挙げたペアとなっている。これが示唆するのは、用例数の多い Koskenniemi がワードペア研究における独特なもののように見えるかもしれないが、挙げられた用例の独自性という観点からは必ずしもそうとは言えず、Shibata、Yamaguchi においてもほぼ同じ割合で、他の研究者と共通するペアと独自のペアの両方の例を提示しているということである。

２．３　共通するペアの意義について

複数の研究に共通する用例は、多くの研究者の総意という意味ではないが、それでも MK におけるワードペア使用の１つの傾向を示すものである。言い換えれば、これまでの諸研究を通じた MK の「典型的なペア」とすることもできるだろう。反面、それはあくまで１つの傾向であり、（１）から（15）までの15という用例数に比べ、はるかに多くのワードペア例を持つ MK（研究により異なるが262～292例）には、「典型的なペア」とは全く異なるタイプのワードペアも存在すると考えるのが自然であろう。また「典型的なペア」であっても、その用いられ方が全て同じであるとは限らない。各々のペアが置かれた文脈を考慮した場合、異なる意味の様相を示す用例もあるのではないだろうか。

このような観点から、以降、３章では上述の「典型的なペア」が Book II においてはどのように用いられているか、その用例のヴァリエーションについて考察する。また４章では「典型的なペア」とは異なり、あまり言及がなかったペアではあるが、Book II においては重要な意味を持つと考えられるいくつかの例について考察を加える。

３　「典型的なペア」の考察－Book IIの文脈における用例

ここで言う「典型的なペア」とは、２章で考察した、これまでに複数の研究者によって指摘されてきたペアのみを指す。こうしたペアの中には、Book II でもやはり頻繁に見られるものと、逆にほとんど見られないものも含まれている。ここでは、２．２で挙げたペアの中から、Book II で用いられた例とは若干ニュアンスが異なる意味で用いられていると考えられる例や、頻度などの点で違いが見られる例について考察する（結果として考察の対象となるのは（１）(３)(４)(５）の４例である)。またいくつかの例の考察においては、上述のような相違点は、Book I と Book II の内容や構成の違いを反映しており、特に旅に関する記述の際に異なった意味やニュアンスを表現する場合もあることを論じる。

主に Book II を考察の対象とする理由は２点ある。１点目は、Book II はMKの２人の筆記者のうち１

人目とされる人物が亡くなった後のことが語られているため[2]、当該テキストが誰の手によるものかといった MK 特有の問題が（若干ではあるが）回避できること。２点目は、Book I では必ずしも時間軸に沿って語られているとは言えない部分も多いが、Book II では物事が語られる順序に整合性があること。特に２点目は本研究において重要である。Book II はほぼマージェリーの旅の行程に沿って語られており、それは再構成されたかのような Book I の記述とは大きく異なる、Book II ならではの特徴と言うことができる。このことは今回の研究のアプローチ、すなわちテキストの文脈に沿ったペアの考察という点では、より目的に合致すると考えられる。

これ以降の用例の引用は、Staley版（電子テキスト）を用い、用例の位置を示す際にはその行番号を記す。Staley版は Book I が２つのセクション、Book II が１つのセクションとに分かれているが、特に注記がない限りは Book II からの引用である。テキストを精査する際には Meech版や現代英語訳（Staley、Windeattの２つ）、日本語訳（石井・久木田）も参考にした。

３．１　*cher* and *cuntenawnce*

このペアは前述したように Shibata、Yamaguchi、Koskenniemi が揃って例に挙げるなど、MK を代表するペアの１つであると考えられている。しかし実際には MK 全体というよりも Book II に特徴的なペアである点が、以下の考察から明らかになると思われる。

用例数に関して言えば、このペアは MK 全体で12例が用いられているが、その内訳は Book I で７例、Book II で５例となっている。数では Book I の方が多いが、Book I と Book II とでは元の行数および章の数が大きく異なるため[3]、頻度では明らかに Book II が上回る。

ではなぜこのペアは Book II において頻繁に用いられているのだろうか。テキストの文脈を見ると、Book II において伝えるべき内容との関係が深いことがわかり、頻出するのはむしろ自然なことであると考えられる。以下は Book II における *cher* and *cuntenawnce* の５つの用例である。

(16) Sche, many tymys syhyng, was hevy in *cher* and in *cuntenawnce*.（168）
(17) Thei clepyd hir Englisch sterte and spokyn many lewyd wordys unto hir, schewyng unclenly *cher* and *cuntenawns*（388-90）
(18) The seyd creatur, parceyvyng thorw her *cher* and *cuntenawnce* that thei had lityl affeccyon to hir persone（526-27）
(19) A yong man whech beheld hir *cher* and hir *cuntenawns*, mevyd thorw the Holy Gost, went to hir（617-18）
(20) The ermyte schewyd schort *cher* and hevy *contenawnce*, neythyr in wil ne in purpos to bryng hir hom to Lynne as sche desiryd.（643-44）

Book II の旅においてもマージェリーは様々な人と出会うことになるが、中には彼女に冷淡であったり、失礼な態度を取る者もある。そのような場合には、(17)(18)(20) の例のように、その者たちの悪しき表情を示すために *cher* and *cuntenawnce* は用いられる。

2　Meech and Allen や、Windeatt（現代英語訳）の示す年表などを参照した。
3　Staley 版で Book I は 5,246 行、89 章。そのうち２つの序 129 行分がある。これに対して、Book II は 659 行、10 章（141 行分の“Long Prayer”は除く）。Book II は Book I の 10 分の１程度の分量である。

比較のために Book I から１例を引用する。Book I では、以下のような例が主であると考えられる。ここに引用するのは聖母をはじめとする数々の聖人が彼女に助言し、マージェリーが感激して涙を流している場面である。

(21) Sumtyme owyr Lady spak to hir mend. Sumtyme Seynt Petyr, sumtyme Seynt Powyl, sumtym Seynt Kateryn, er what seynt in hevyn sche had devocyon to aperyd to hir sowle and tawt hir how sche schuld lovyn owyr Lord and how sche schuld plesyn hym. Her dalyawns was so swet, so holy, and so devowt that this creatur myt not oftyntymes beryn it but fel down and wrestyd wyth hir body and mad wondyrful *cher* and *contenawns* wyth boystows sobbyngys and gret plenté of terys, . . . （Book I, 902-7）

Book II においても、マージェリーが涙を流している場面で用いられた例（19）などもあるが、そこではある若い男性が彼女の泣いている姿を見るといった描写であり、上の（21）のような、マージェリーが泣いているときの激しさといったものは感じられない。こうした比較から、Book II における *cher* and *cuntenawnce* は、Book I の用例のように感情が露わになったときの表情そのものを指すというよりも、むしろ表情から読み取ることのできる情報を示していると考えられる。

なおBook I の方にも「記号としての表情」を示唆する例がある。これは MK において cuntenawns が cheer とのペア「以外」の形で用いられた唯一の例である。ここでの cuntenawns のペアの相手は「しるし」である。

(22) The stiwarde, seyng hir boldenes that sche dred no presonyng, he strobelyd wyth hir, schewyng unclene *tokenys* and ungoodly *cuntenawns*（Book I, 2663-64）

cher and *cuntenawnce* というペアは Book II の文脈においては、多様な登場人物の表情から読み取られる態度の意外性や必然性を印象付け、ある意味で劇的な展開を促していると考えられる。このようなワードペアの使用は、そのほとんどが旅先での出来事である Book II において、旅の出会いといった場面を演出する表現としてよく機能していると言えるのではないだろうか。Book II のいくつかの例における cuntenawns は、マージェリー自身の表情でもなく、感情の昂りによるといった宗教的なニュアンスも伴わない。表情そのものと cuntenawns の指し示すものとの間にずれがあることは、単なる表情の描写ではない、*cher* and *cuntenawnce* というペアの果たす役割を示唆していると考えられる。

３．２　*help* and *socowr*

このペアは、Book II では以下の２箇所に見ることができる。

(23) *Help* us and *socowr* us, Lord, er than we perischyn er dispeyryn, for we may not long enduryn this sorw that we ben in wythowtyn thi *mercy* and thi *socowr*.（225-27）

(24) Sche had gret joy in owr Lord, that sent hir *help* and *socowr* in every nede, and thankyd hym wyth many a devowt teer, wyth meche sobbyng and wepyng（543-45）

（23）と（24）はそれぞれ動詞と名詞という違いがある。なお（23）の後半では、socowr は別の語（mercy）とペアになっている。これらとは別に、Book II において help が socowr 以外の語とペアになる例については、以下のように felaschip（fellowship）とのペアがある。

（25）he schulde sendyn hir *help* and *felaschip* wyth the which sche myth gon（271-72）

Book II においても、Book I と同様に、マージェリーは旅の仲間と仲違いをして置いていかれることもしばしばである。前述した *cheer* and *countenance* の用例の中にも「快く迎え入れてもらえると思っていたのだが、それに反して冷たい態度であった」といったものがあり、これは前節で論じたように意外なことであると同時に、大いに失望を持って受け止められたものと推測される。help と socowr をめぐるペアはそれの裏返しであると言うことができるだろう。ここで言う「助けを得る」とは、まず第一に人との出会いである。マージェリーが旅の途中で最も望み、また神に感謝することは、同行する仲間を得ること（得たこと）についてである。これは例えば（23）のように、言葉としては神との対話という形をとりつつも、女性であり老齢でもある彼女にとってはむしろ旅先での率直な心情の吐露であるようにも見える。そこには精神的な救いという意味とは別の、より現実的な助けを求める強い気持ちがあり、それがワードペアを通じて表現されたと考えられる。

３．３　*hevy* and *sory*

まずは *hevy* and *sory* の Book II における２つの例を見る。

（26）Hyr felaschep was glad and mery, and sche was *hevy* and *sory* for dred of the wawys.（293-94）

（27）Therfor sche toke hir wey to Cawntyrberyward be hir self alone, *sory* and *hevy* in maner that sche had no felaschep ne that sche knew not the wey.（536-38）

２章での各研究者が挙げた例でも示したが、*hevy* and *sory* のペアについては、２語の語順は固定されておらず、逆の語順も見られる。このペアについては、特に hevy に関する考察をさらに進めるために、hevy が別の語とペアになっている例を下に挙げる。

（28）Hir felaschep thowt thei sped no wey and weryn *hevy* and *grutchyng*.（291-92）

（26）（27）（28）には共通して、文中には felaschep（fellowship）が含まれている。前節で *help* and *socowr* について述べたことにも通じるが、ここでもやはり人間関係が重要な問題であり、例えば（26）の例のようにそれがこじれてしまった場合にはまさに hevy をめぐるワードペアが使用されるにふさわしい状況に陥ることになっている。

さらにテキストを詳細に見ていくと、hevy のペアに関しては、Book II におけるワードペアとしてはむしろ *hevy* and *sory* よりも顕著ではないかと考えられる例が２つあることに気付く。その１つ目は diswer とのペアである。このペアは Book I にも１例、Book II には２例ある。Book II においては diswer という単語が用いられるのはこのペアによる２例のみである。ここでは３例全てを引用する。

(29) Sche was than in gret *hevynes* and *diswer* how sche schulde do the byddyng of God, whech sche wolde in no wey wythstondyn, and had neithyr man ne woman to gon wyth hir in felawschep. (264-66)

(30) Sche was in gret *diswer* and *hevynes*, the grettest, as hir thowt, that sche had suffyrd syn sche was comyn owt of Inglond. (478-79)

(31) Than this creatur, beyng in gret *hevynes* and gret *diswer*, answeryd agen in hir mende (Book I, 1761-62)

diswer は *Middle English Dictionary*(オンライン版)において"Doubt, uncertainty, perplexity"とされているが、その定義における初出の例文は MK となっている。そういった意味では diswer が用いられたこのペアは、MK を代表するペア、MK 特有のペアとすることも可能であろう。

hevy and *sory* よりも顕著であろう2つ目の例は、名詞の hevynes, hevynesse が drede とペアになっているものを4例指摘することができる。

(32) Thus was I mevyd in my sowle and no rest myth han in my spiryt ne devocyon tyl I was consentyd to do as I was mevyd in my spiryt, and this is to me gret *drede* and *hevynes*. (177-79)

(33) Yyf thu woldist verily trostyn in me and no thyng dowtyn, thu maist han gret comfort in thi self and mythist comfortyn al thy felaschep wher ye ben now alle in gret *drede* and *hevynes*. (232-34)

(34) Sche had mech *drede* for hir chastité and was in gret *hevynes*. (390-91)

(35) Than went thei forth togedyr owt of the towne ageyn the evyn wyth gret *drede* and *hevynes*, mornyng be the wey wher thei schuldyn han herborwe that nyth. (485-87)

(34)は形としてはワードペアとするかどうかについて異論もあろうが、関連性を示すために併せて引用した。これを含めないとしても3例となり、前述した Book II に見られる *hevy* and *sory* の2例よりも多い。

それぞれ独自性と用例数という観点で *hevy* and *sory* を上回る2つのペアの存在は、「典型的なペア」よりもはっきりとワードペア使用の特徴が表れた例もあることを示すものである。同時に、MK 全体からの抽出であった *hevy* and *sory* が Book II では顕著なものではなかったことにも着目すべきである。このことは、ワードペアをはじめとする様々な面で、Book II の言説が Book I のそれとは異なる可能性を示す一例ではないかと考えられる。

3.4 *hyndryn* and *lette*

このペア自体の用例は Book II には見られない。それだけであれば本章で考察すべきではないかもしれないが、その構成要素である単語 lette (let[4]) は、Book II におけるキーワードの1つであろう'journey'すなわち「旅」そのものを指す単語と関連付けられている。ここでは、それら2語の関係

4 現代英語ではあまり用いられない「妨害する」あるいは「妨害」の意味で用いられたもの。なお多くの辞書には without let or hindrance というフレーズが紹介されており、ペア自体は現代英語にも残ったことがわかる。

およびそれぞれの語がワードペアで用いられた際の表現について考察する。

まずは参考のため Book I における *hyndryn* and *lette* の中から用例を１つ挙げる。これは主の言葉であり、その中で用いられた lette は、神がマージェリーに示す恩寵やそのことを広く知らせることを「妨げる」といった意味で用いられている。

(36) "Dowtyr, I wil not han my grace hyd that I geve the, for the mor besy that the pepil is to *hyndryn* it and *lette* it, the mor schal I spredyn it abrood and makyn it knowyn to alle the worlde." (Book I, 3279-81)

これに対して、Book II において let[ting] が用いられる場合、その多くは「旅の遅れ」あるいは「旅を遅れさせたくない」といった内容を表現するためのもので、journey と共に用いられている（下の２例では該当する箇所に下線を付加する）。

(37) Thei seydyn, yf sche myth duryn to gon as yerne as thei, sche schulde be wolcome, but thei myth not han no gret <u>lettyng</u>; nevyrthelesse thei wolde helpyn hir forth in hir <u>jurné</u> wyth good wyl. (429-431)

(38) Sche preyid hem that sche myth go wyth hem, and thei seydyn schortly that thei woldyn not <u>lettyn</u> her <u>jurné</u> for hir, for thei weryn robbyd and haddyn but lityl mony to bryng hem hom, wherfor thei must nedys makyn the scharpar <u>jurneys</u>. (434-36)

MK における journey とは、マージェリーや他の旅行者の巡礼の旅でもあり、世俗的な旅でもある。マージェリーにとって、巡礼の旅や各地にある聖なる品々を見に行く旅は、与えられた苦難であると同時に意義深いものであったと考えられる。宗教的な意味で、マージェリーにとってはある種の喜びをもたらすものでもあろう。しかし、(37) で語られた一団と離れてすぐ、別の一団に出会った (38) の例では特に、journey が他所では示すような宗教的な意味は希薄である。(38) の旅行者の一団にとって、盗みに遭って金を失い[5]、故郷へと急ぐ旅に用いられた jurné, jurneys は、１日も早く切り上げたいという彼らの切実な状況を伝えるものである。

加えて、Book II で用いられた let のワードペアには以下のようなものがある（この例ではペアすなわち２語を超えて、３語が対応している）。苦労しながら、結果として遅れつつも進んでいったことが語られている。

(39) Sche kept forth hir felaschep wyth gret *angwisch* and *disese* and meche *lettyng* unto the tyme that thei comyn to Akun. (411-12)

hyndryn and *lette* のペアの用例が MK の Book II にない点は残念である。そのようなペアが別の作品（特に旅が描かれた作品）で見られるかなどについては今後の調査で明らかにしたいと考えている。Book I ではどちらかといえば精神的な意味での障害を指していた *hyndryn* and *lette* が、おそらくはより

5　これについては、ワードペアとは呼べないが、and により語句が結び付けられたワードペアに類する表現が用いられている（"thei weryn robbyd and haddyn but lityl mony to bryng hem hom"）。

直接的な障害物や旅の遅れそのものを表す例も見られるのではないかと期待される。

なお journey そのものがワードペアの形になっているものは、Book II を見る限りでは下の１例のみである。

(40) It was gret merveyl and myracle that a woman dysewsyd of goyng and also abowtyn three scor yer of age schuld enduryn cotidianly to kepyn hir *jurney* and hir *pase* wyth a man fryke and lusty to gon.（328-30）

このペアにも「旅の遅れ」に対する懸念を見ることができる。ペアが用いられているのは、作品中でマージェリーの年齢についての言及がある箇所である。「高齢のためそのような移動のペースについていくのは困難であった」といった内容であり、そのことを明確に示すためにワードペアが用いられたと考えられる。

４　Book IIに特徴的なペアー旅をテーマにしたペア例の考察

ここからはマージェリーの旅を描写するために用いられたペアの中でも、特に Book II において重要であると考えられる、旅をテーマにした３つのペアについて考察する。*lond* er *watyr* は旅の「道程」を、*mete* and *drynke*, *etyn* and *drynkyn* は旅先での「飲食」を、そして *lofe* and *leue* は「別れ」を表すペアである。これらは前述の「典型的なペア」とは異なり、これまであまり考察が加えられなかったものかもしれない。中には見過ごされてきた感のある例も含まれているかもしれない。しかしそれぞれのペアの重要性は、Book II の旅という文脈を考えた場合には見過ごすことのできないものである。

４．１　*lond* er *watyr*

このペアは多くの場合、「陸路でも海路でも安全に旅するよう神の御加護がある」といった内容で用いられている。その意味においては陸路・海路双方、あるいは「どちらでも（同じこと）」というニュアンスだが、関連する表現を併せて考察すると、どちらの道程を取るかが重要になる場面も多々あることが明らかになると考える[6]。

Book II にあるペアの例としては以下のような例が挙げられる。

(41) whedyr hys modyr wolde cownselyn hym to comyn be *lond* er be *watyr*, for he trustyd meche in hys moderys cownsel, levyng it was of the Holy Gost（85-86）

(42) And, as sche preyid for the sayd mater, it was answeryd to hir sowle that whedyr hir sone come be *lond* er be *watyr* he schulde comyn in safwarde（88-89）

(43) as is wretyn beforn, that whedyr thei come be *lond* er be *watyr* thei schulde comyn be safté（99-100）

(44) Sche thowt in hir mende, Lord, for thi lofe cam I hedyr, and thu hast oftyn tyme behite me that I schulde nevyr perischyn neithyr on *londe* ne in *watyr* ne wyth no tempest.（212-14）

6　Book I には *lond* er *watyr* といった組み合わせのペアは見られない。“Long Prayer”には１例あるが、これは該当する２語だけでなく多くの語句が列挙されたものである。

(45) Whan thei wer passyd the *watyr* and went on the *lond*, the monke wyth the chapmen and the seyd creatur wyth hir man alle in felaschep togedyr in waynys, thei comyn forby an hows of Frer Menowrys havyng mech thrist. (351-54)

このうち（43）には「前述したように」とあるが、これは（42）において啓示された通りに安全に息子夫婦が到着した際に用いられたものである。

これらの例に加えて、２語があまりにも遠いので「ペア」と呼ぶにはためらわれる例もある。下の（46）は、watyr と lond の間に関連性は見られるものの、明らかに他の語句が多く含まれているために、ワードペアというよりは別の修辞法によるものと考えられる。

(46) Be the *watyr* wolde sche not gon as ny as sche myth, for sche was so afrayd on the see as sche cam thedirward; and be *lond* wey sche myth not gon esyly, for ther was werr in the cuntré that sche schulde passyn by. (266-69)

（46）で語られている内容は、マージェリーは海路を嫌っていて陸路を取ろうとするが、当時の社会情勢により戦争という危険が陸路にも存在することである。これは出発前の記述であり、これからどちらの旅程を取るか、陸路と海路のそれぞれにある危険を考えて彼女は不安を感じている。なおこの直前の文には、３．３で述べた *hevynes* and *diswer* の例の１つが用いられ、全体としてマージェリーの不安を強く印象付けている。

さらに、当該ペアではないが、陸路と海路との対比を表す例と考えられるものが他にもある。下の（47）では watyr ではなく see が用いられている。また接続詞についてもand 等ではなく as . . . as による結び付きとなっている。

(47) I am as mythy her in the *see* as on the *londe* (228-29)

（47）での“I”とは神（Lord）のことである。「陸上でも海上でも力を持つ」と併記すること自体、陸路と海路との状況の違いを示唆しているのではないだろうか。

旅の途中でマージェリーが最も恐れることは貞操を汚されることである[7]。陸路において彼女はそのような恐れにとらわれながら旅を続ける必要があった。反面、彼女は陸か海かで言えば、できれば海路を避けたいと考えていることは、上に挙げたいくつかの例から見て取ることができる。矛盾するようではあるが、複雑な感情がよく表現されているとも考えられる。別の人物については、旅において恐れる対象も、その度合いも異なることになる。マージェリーに一時同行する男は強盗などを恐れて、先を急ごうとしていると言うが[8]、これは彼女を置いていくための方便であるかもしれない。

旅に対する「恐れ」は人によって違う…これは当然のことではあるが、その点が MK において書き分けられていることには着目すべきである。MK の旅の記述は、この点に関する限り的確であり、またそれはいくつかのワードペア表現を通じて成し遂げられたものでもある。

---

7 “And on nyghtys had sche most dreed oftyn tymys, and peraventur it was of hir gostly enmy, for sche was evyr aferd to a be ravischyd er defilyd.” (498-99)

8 “He seyd that he was aferd of enmyis and of thevys that thei schulde takyn hir awey fro hym peraventur and betyn hym and robbyn ther to.” (318-19)

4．2 *mete* and *drynke, etyn* and *drynkyn*

（48） Ther was a good woman had hir hom to hir hows, the whech wesche hir ful clenly and dede hir on a newe smok and comfortyd hir rith mech. Other good personys had hir to *mete* and to *drynke*.（511-13）

mete and *drynke* の基本的な意味内容は、（48）で下線を付した“comfortyd hir rith mech”とほぼ同じであると考えられる。それは広く解釈すれば「もてなす」という行為である。このことは、下の（49）や（50）の例に見られるように、飲食に加えて必要なものや様々なものを与えるということにも繋がっている。

（49） The forseyd creatur fond swech grace in the maistyr of the schip that he ordeynd for hir *mete* and *drynke* and al that was necessary unto hir as long as sche was wythinne the schip（251-53）

（50） Ther was on worschepful woman whech specialy schewyd hir hy charité bothyn in *mete* and *drynke* and other rewardys gevyng（576-77）

（51） Sche sparyd hem not, sche flateryd hem not, neithyr for her giftys, ne for her *mete*, no for her *drynke*.（597-598）

実際のマージェリーの旅路では、様々な方面から物心ともに支援があったことだろう。*mete* and *drynke* というペアは、Book II に限って言えば、マージェリーに寄せられた好意を象徴的に表していると解釈することができる。

飲食のペアは、異なる要素である「飲」と「食」とを組み合わせたというよりも、それらを含めたある種の状況を指すものとして捉えるべきである。名詞の drynke は上述のように mete とのペアで４例あるが、実は Book II では、それ以外の用例で名詞の drynke が用いられた例は見当たらない。さらに、動詞の drynkyn については以下に挙げるように３例が eat とのペアで、それ以外で用いられたものは１箇所あるのみである。drynke, drynkyn いずれも単独ではほとんど用いられていないことから、当該のワードペアにおいては全体が１つの表現として機能していると考えられる。

（52） The worthy[9] woman grawntyd hir al hir desyr, and dede hir *etyn* and *drynkyn* wyth hir, and made hir ryth good cher（420-22）

（53） Sche dede hym *etyn* and *drynkyn* and comfortyd hym ryth meche.（445-46）

（54） and aftyrward he *ete* and *dranke* wyth hir in the tyme that sche was ther and was ful glad to ben in hir cumpany（635-36）

（52）では、「望みを聞く」「喜ばせる」などの一連の行為の中に当該表現があることが見て取れる。また（53）では上述の *mete* and *drynke* と同じく comfortyd に関連している。動詞のペアも、前述の名詞のペアと同様の用いられ方をしていることが確認できる。

9 この“worthy”は Staley 版では２行に渡っている。

もてなしを受ける場面に限らず、旅先においては「飲」「食」そのものが重要な関心事の１つである点に疑いを入れる余地はない。もっとも上のような考察からは、MK において飲食に関する当該のペアが用いられる場合には、出された食べ物や飲み物のことに留まらず、その背後にある「旅先での人との出会い」あるいはその喜びを表現するものとして使用されたと言うことができる。いわば具体的な記述によって抽象的な事象を表わしたものであり、これはワードペア表現が持つある種の広がりを示す例ではないかと考えられる。

４．３　*lofe* and *leue*

このペアは Book II に２例ある。Book I にも１例あるので併せて引用する。

(55) And so sche, desiryng the benevolens of hir frendys, utteryd hir conseyte to hir eldmodyr, declaryng to hir the desyr of hir frendys, preying hir of good *lofe* and *leve* that sche myth resortyn to hir owyn cuntré. (112-114)

(56) Than sche preyid the pilgrimys that weryn in the wayne thei schulde heldyn hir excusyd and latyn hir payn for the tyme that sche had ben wyth hem as hem lykyd, for sche wolde gon to a worschepful woman of hir nacyon that sche parceyvyd was in the towne, wyth the whech sche had mad forward whan sche was at Akun for to gon hom wyth hir into Inglond. Sche had good *lofe* and *leve* and partyd fro hem. (470-471)

(57) The preste, havyng confidens in hys promysse, was wel content, grawntyng hym good *lofe* and *leve* unto the day whech he had promysed to come ageyn. (Book I, 1302-04)

MK 全体を見渡すならば、３例という用例数は決して多いとは言えない。しかし Book II に限って言えば、*lofe* and *leue* もこれまでに挙げた例と同様に Book II を代表するワードペアの１つであると考えられる。

まずは頻度について考察する。ワードペア全般について言えば、lofe に関するペアとしては、このペアよりも（考察するテキストによっては）頻出するであろうペアは数多く存在する。例えば、Book I で実際に用いられたペアの中からでも、love and affection、love and devotion、love and desire、love and joy など多くの組み合わせのペアを指摘することが可能である。しかし、実はBook II に限って言えば、love and affection などのペアはほとんど見ることができない。母体となるテキストの分量が少ない、内容がどちらかと言えば宗教的でないなど原因についてはいろいろと探ることはできるが、結果としては *lofe* and *leue* の数がむしろ多いということになっている。

次に、意味内容の点で考察する。leve の示す意味内容は「許し」であり「暇乞い」でもあると考えられる。Book II における旅は、Book I での巡礼地を回る旅ではなく、神の加護を受けた旅であると同時にマージェリーの家族の問題から始まった旅でもある。本来マージェリーはイプスウィッチまでの国内の旅を許されたもので、海を渡ることは彼女の聴罪司祭に無断で行ったことである。なぜそのようなことを行ったかと言えば、それは彼女の心の中で、主が海を渡る許しを与えたからであった。このように、彼女の旅の根底には主の許しがあるということになり、その点を考慮するならば、lofe と leue とのペアの成り立ちにも、Book II の旅ならではの意味が加わることになるであろう。

以上の２つの観点から総合的に判断すると、Book II だけに限定するならば、*lofe* and *leue* は重要なペ

アの１つであると解釈することができる。このような考察から示されるのは、一言で言えばワードペアの頻度と意味内容との関係性には難しい面もあるということである。明らかに頻度の高いペアを無視することはできないが、それほど頻度の高くないペアの中にも、テキストにおける位置付けや文脈に基づいた意味内容といった点で、重要な意味を表わしていると考えられる例は存在する。

５　むすび

本テキストはマージェリーの幻視や精神的な変遷についての宗教書であるが、信仰そのものに関係する内容が語られると共に、彼女の旅の様子が丁寧に綴られているものでもある。おそらくマージェリー自身にとっての旅は信仰と渾然一体に捉えられたものであり、宗教的な体験や観念に裏打ちされたものであろう。それでも表現された著作を精査すると、旅の苦労や世俗的な物や事、さらにはそれらの中で見出される喜びなどが生き生きと描写されている。旅の描写には信仰のそれとは異なる言説も用いられているが、そこには信仰に関して用いられるペアとは異なるペアの用例や、あるいは同様のペアの使用であっても用法やニュアンスの点で違いが見られることなどが確認され、全体としてワードペアが効果的に用いられていると言うことができる。このような考察から、ワードペアは表現技法として機能するものであり、多様な表現を可能にすることがワードペアの持つ役割の１つであると改めて認識されるのではないだろうか。

Bibliography

テキスト

Meech, Sanford Brown and Hope Emily Allen, eds. *The Book of Margery Kempe*. EETS O.S. 212. London: Oxford UP, 1940.

Staley, Lynn, ed. *The Book of Margery Kempe*. Originally Published in *The Book of Margery Kempe*, Kalamazoo, Michigan: Medieval Institute Publications, 1996. TEAMS Catalogue: Staley. TEAMS Middle English Texts. <http://www.lib.rochester.edu/camelot/teams/staley.htm> (accessed January 4, 2011).

現代英語訳

Staley, Lynn, ed. and trans. *The Book of Margery Kempe*. New York: Norton, 2001.

Windeatt, Barry, trans. *The Book of Margery Kempe*. Harmondsworth, UK: Penguin, 1985.

日本語訳

石井美樹子・久木田直江訳『マージェリー・ケンプの書: イギリス最古の自伝』慶應義塾大学出版会、2009.

参照文献

青木繁博「中世英語散文の文体とペアワード—Julian of NorwichとMargery Kempe」『新潟青陵大学短期大学部 研究報告』第37号 (2007): 59–72.

Katami, Akio. "Word Pairs in Middle English Mystic Prose of the Fourteenth Century."『埼玉学園大学紀要』経営学部篇 第9号 (2009): 177–189.

Kikuchi, Kiyoaki. "Aspects of Repetitive Word Pairs." *POETICA* 42 (1995): 1–17. (Tokyo: Shubun International Co., Ltd.)

Koskenniemi, Inna. "On the use of repetitive word pairs and related Patterns in *The Book of Margery Kempe*." *Style and Text: Studies Presented to Nils Erik Enkvist*. Ed. Hakan Ringbom. Stockholm: Sprakforlaget Skriptor AB, 1975. 212–218.

Miwa, Nobuharu and Su Dan Li. 2003. "On the Repetitive Word-Pairs in English—With Special Reference to W. Caxton—."『鹿児島大学法文学部紀要 人文科学論集』58 (2003): 49–66.

Shibata, Shozo. "Notes on the Vocabulary of *The Book of Margery Kempe*." *Studies in English Grammar and Linguistics: A Miscellany in Honour of Takanobu Otsuka*. Eds. Kazuo Araki, et al., Tokyo: Kenkyusha, 1958. 209–220.

Shimogasa, Tokuji. "Binomial Expressions in *Le Morte Arthur*." *Bulletin of the Faculty of International Studies, Yamaguchi Prefectural University* 3 (1997): 59–74.

Stone, Robert Karl. *Middle English Prose Style: Margery Kempe and Julian of Norwich*. The Hague: Mouton, 1970.

谷明信「初期中英語 the 'Wooing Group' の Word Pairs の用法とその特徴」『兵庫教育大学研究紀要』第23巻 第2分冊 (2003): 19–24.

渡辺秀樹「同意語並列構文の系譜」『英語青年』140.6 (1994年9月号): 285–287.

Wilson, R. M. "Three Middle English Mystics." *Essays and Studies*. New Series 9 (1956): 87–112.

Yamaguchi, Hideo. "A Study of the *Book of Margery Kempe*."『神戸女学院大学論集』第18巻 第1号 (1971): 1–44.